祭で賑わう 堀川

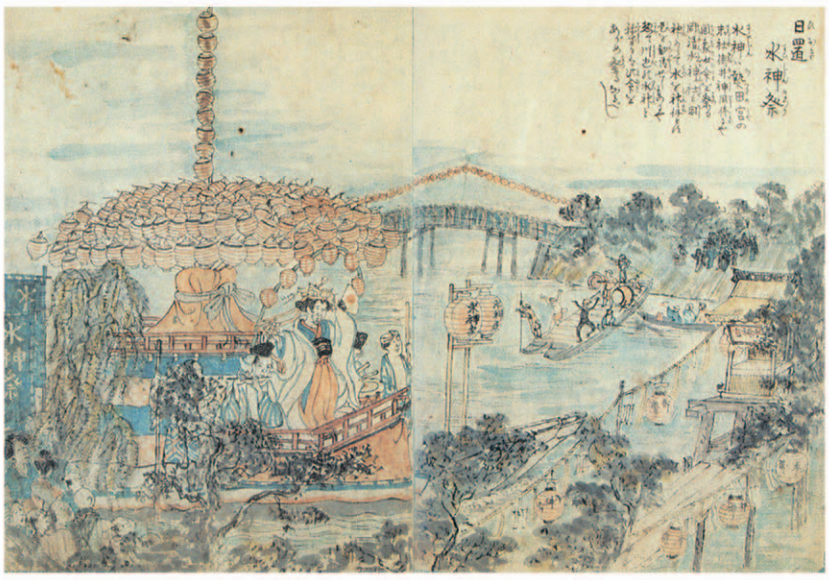
堀川は城下唯一の幹線輸送航路なので、ふだんは船への荷物の積み下ろしなど忙しく立ち働く人々の喧噪と汗が匂う場所である。その一方で、城下で唯一の川である。水は心も潤し、生活に疲れた人々をリフレッシュする。堀川は、お祭りなど華やかな行事の舞台にもなっていた。

天王崎祭礼

『尾張名所団扇絵』

堀川が一番華やいだのは、天王崎祭礼であろう。碁盤割の市街地から間近な洲崎神社で行われる夏の祭だ。

神輿渡御では船に神輿（みこし）を載せて堀川をのぼり、堀留（現：朝日橋）の御旅所に行って陸路で還御する。夕闇が迫ると堀川に浮かぶ巻藁船の提灯に火が入り、幽玄な明かりがゆらゆらと川面に映る。もっとも、船上で舞を奉納している巫女は、実は男性。おもしろおかしい所作で、見物客を笑わせたという。神事に併せて、イベント的な性格もあったようだ。神社で一年間保管した御葭を堀川に流す御葭流しも行われ、御葭を得ようと人々が争い熱狂した祭である。



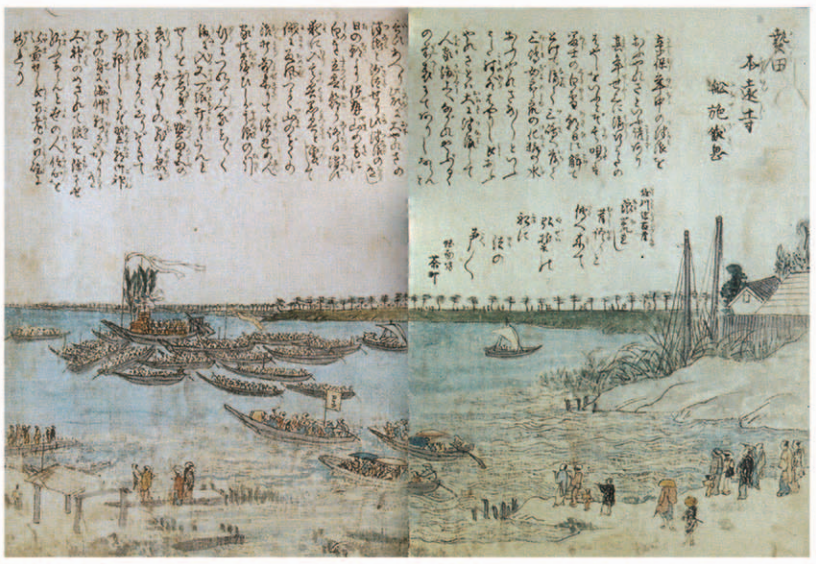
『尾張年中行事絵抄』（東洋文庫蔵）

堀川水神祭

享和2年 (1802) から始まった新しい祭である。日置のあたりには漁師も住んでおり、豊漁を祈願して始めたという。

日置橋の北、堀川のなかに仮の社を造り、たくさんの御神灯や幟・幕で飾り立てた船を浮かべてある。船上では巫女の姿をした若い衆が、面白おかしく神楽などを踊り見物の人々を笑わせ、納屋橋まで遡上してくる祭だ。

船施餓鬼（せがき）供養



『尾張年中行事絵抄』（東洋文庫蔵）

熱田の海では、亡くなった人々を悼む、施餓鬼供養も行われた。

享保7年 (1722) 8月の台風によって、熱田で100名以上の死者を出した。これを契機に熱田の本遠寺が船を浮かべての供養を始めた。本堂での説法後、僧侶や信者多数が船に乗り込み、お題目を唱えて供養した。後には水死者の供養となり、日本三大川施餓鬼と言われるほど盛大で、今も行われている。